様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１５日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１３２００２３
研究課題名（和文）　＜教養＞の比較思想史的研究―市民型リベラル・アーツをめざして

研究課題名（英文）　Comparative Study in the History of the Ideas of “Cultivation” and “Culture”:A Quest for Liberal Arts for Citizenship

研究代表者
関口　正司（SEKIGUCHI MASASHI）
九州大学・大学院法学研究院・教授
研究者番号：６０１６３１０１

研究成果の概要（和文）：
本研究では、今後の日本における市民型教養のあり方を探るために、日本、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカにおける＜教養＞の思想を歴史的に解明した。研究に際しては、思想を比較の視座から立体的に捉えることに留意するとともに、政治的教養という点を強く意識した。研究の結果、抽象的知識ばかりでなく実践的な行為や所作のあり方までを教養に取り入れようとする興味深い企てが、様々な歴史的文脈の中で息づいていたことが確認できた。

研究成果の概要（英文）：
In this study the ideas of “Cultivation” and “Culture” in Japan, Britain, France, Germany and America were investigated historically in order to construct a prospect for liberal arts for citizenship in the context of our country. Comparative perspectives and the connection between cultivation and political life were particularly taken into consideration in the course of the research. As a result, attractive attempts for incorporating practices and manners as well as abstract ideals into the concept of culture were traced in various historical contexts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２０１０年度	1,800,000	540,000	2,340,000
２０１１年度	1,800,000	540,000	2,340,000
２０１２年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	6,400,000	1,920,000	8,320,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：思想史、政治思想史、リベラル・アーツ、教養

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、長らく続けてきた思想史研究と大学評価という二つの仕事を通して、現在の思想史研究に問われている重要課題の一つが、高等教育の再生のための知的思想的基盤の探究であることを痛感し、本研究のテーマである＜教養＞の比較思想史を構想するに至った。

近年、教養を中心とした高等教育の再生という課題は、中教審答申「新しい時代における教養教育の在り方」（2002 年 2 月）や中央教育審議会大学分科会制度・教育部会「学士課程教育の構築に向けて」（2008 年 3 月）などから明らかなように、政策上の課題となっていた。こうした状況を反映して、日本学術振興会の人文・社会科学振興プロジェクト研

究事業（2003 年開始）では「これからの教養教育」という研究プロジェクトを採用し「教養教育の再構築」と「グローバル化時代における市民性教育」の二つのグループを編成した。このような高等教育や教養への見直しは、世界的規模で進行中であるが、各国の教育制度の歴史的背景や社会的機能の相違のために、他国の政策をそのまま導入することは不可能である。日本には、その歴史的伝統（欧米から移入し伝統と化したものも含まれる）への反省と独自の持ち味の把握を通じた構想が求められている。これが本研究の基本姿勢となった。

２．研究の目的

以上のような背景をふまえて、本研究の構想にあたっては、表面的な制度いじりではなく、深い人間学的洞察に基づく教育観そのものの捉え直しをめざそうとした。この方向で研究作業をコントロールするために、本研究では、＜教養＞というコンセプトを立てることとした。本研究において＜教養＞とは、その語義の範囲を基本的に、人間の cultivation と culture という二つの焦点を有する楕円として理解している。今日の文化研究が概して客観的な culture（それが生み出される社会的構造やそれが果たす文化的機能）に照明を当てるのに対して、本研究は文化が育てる／文化を育てる cultivation の働きへも関心の領野を拡張し、culture と cultivation の相互作用への洞察を示す日米欧における＜教養＞思想の営みを、＜教養＞の比較思想史として解明・叙述することを目指すものである。

３．研究の方法

＜教養＞の比較思想史という研究目的を達成するには、この問題意識を深く共有しつつ、多様で幅広い研究分野で研究を進めているメンバーから研究組織を構成する必要があった。研究成果のある程度の包括性を確保するために、具体的には、デモクラシーに相応しい＜教養＞の解明のための歴史的遺産を有している国々として、英・仏・独・米・日の五カ国を選び、ふさわしい研究者を集めるために慎重な選定を行なった。その結果、以下のような研究組織・各自の研究テーマを設定することとなった。

関口正司◆近代＜教養＞思想史のとりまとめと＜市民型リベラル・アーツ＞構想
井柳美紀◆仏国＜教養＞思想の探究：フランス啓蒙と美的教養思想
鏑木政彦◆米国＜教養＞思想の探究：プラグマティズムにおける実践と教養
木村俊道◆英国＜教養＞思想の探究：初期近代の作法と教養
清水靖久◆日本＜教養＞思想の探究：丸山真男と近代日本の教養
竹島博之◆独逸＜教養＞思想の探究：ドイツにおける市民的教養思想

共同研究の進め方としては、研究代表者１名が、それぞれの地域を担当する分担者５名の調査研究をリードすると共に、研究の進捗状況を管理した。

各研究者の個別研究は、基本的に伝統的な政治思想史研究のスタイルを踏襲したが、本研究課題の＜教養＞の特性を配慮して、専門分野に閉じこもらずに、比較の視点を確保しつつ、また、文化や教育に関する最新の研究動向を踏まえることを促した。また、対話と討論を確保するために、年１回の研究発表会において、全員が進捗状況を報告するようにするとともに、各種の学会・研究会で積極的に発表を行ない、外部からの提言の傾聴に努めた。

また、研究期間前半の基盤作りが後半の具体的成果につながるようにするために、年度ごとの重点目標を設定した。それぞれの重点目標は着実に達成され、それぞれの研究成果に結実した。

４．研究成果

（１）研究分担者の研究成果

①清水靖久

日本の＜教養＞思想について分担した清水靖久は、近代日本の教養思想のなかで丸山真男の思想がもった意味を主に研究した。政治学者丸山は、本研究課題の基本的観点三つのうち、①現代社会においてデモクラシーの基盤となる市民を育成する＜教養＞思想の遺産は何かを生涯考えつづけ、②作法や礼儀など身体的な「型」にまで及ぶ＜教養＞思想の遺産は何かについても一時深く思索した学者だった。本研究は、丸山の思想について次のようなことを明らかにし、近代日本の教養思想の再検討を進める研究成果を挙げた。

丸山の戦後の出発点には、戦前の教養主義的な知識人の無力に対する批判があり、大正教養主義の内面性や非政治性を克服する課題があった。丸山は、戦争直後の民主主義万々歳の叫びに反感を覚えながら半年迷った揚句、人民主権の思想を受入れて「超国家主義の論理と心理」（1946 年）を書いた。その経緯を考察した清水の論文「丸山眞男、戦後民主主義以前」は、丸山の民主主義への懐疑とそのうえでの民主主義の選択について解明した。

丸山の政治学は、「すべてについて何事かを知り、何事かについてはすべてを知る」という「恐ろしく困難な努力を宿命的に課せられている政治学の途」（『現代政治の思想と行動』1957 年）を歩むものだった。丸山がそのような知識人を「教養人」と呼んだ背景には、近代日本の非政治的な教養への批判があっ

た。清水の論文「政治学と教養」は、その「教養人」がＪ・Ｓ・ミルの言葉とされたことを含めて、デモクラシーを支える政治学と教養との関係を考察した。

1960 年前後の丸山は、シーグフリードが言う内面的な教養を重視し、精神的貴族主義と結びついた民主主義を説くようになった（「「である」ことと「する」こと」1961 年）。さらに日本思想史を見直し「型」のもつ意味を強調するに至ったが、高度に知的な教養思想を克服しつつあったのだろうか。その思索はどこへ行き着くものだったのか、1968-69 年の東大紛争後の軌跡を辿ることは、資料公開が進まない現状では容易でなかった。

1970 年代にエリート学生文化としての教養主義は没落したと言われるが、そのなかで丸山は教養人の理念を保ったようであり、専門バカにもディレッタントにも陥らないことを知識人の宿命と考えた。丸山の民主主義の思想が霞んだかに見えた晩年、談話「戦後民主主義の『原点』」（1989 年）を残した経緯を明らかにした清水は、論文「戦後民主主義の原点としての人民主権」を書いた。

②鏑木政彦

デモクラシーの基盤となる市民を育成し、共同社会の再生に不可欠となる教養思想の遺産として、アメリカのデューイを取り上げて分析した。デューイと同様にドイツ思想から大きな影響を受け、日本の教養思想に大きな影響を与えた和辻哲郎と比較しながら、以下のような成果をえた。

和辻は、人格主義と退嬰的な世紀末文化の間で生じた精神的危機を、古代日本文化研究を通じて克服した。和辻はそこで得た上代人のイメージを大乗仏教の「空」の論理で概念化し、それに基づいてヘーゲルの Sittlichkeit を批判的に受容しつつ、日本精神を基礎づけた。それに対して、デューイは、原罪と回心を強調するピューリタン倫理と個人の自由と責任を強調する民主主義との間で生じた精神的危機を、当時のアメリカで受容されたヘーゲル哲学を通じて乗り越えた。それは主観と客観を「理性(Reason)」の運動として統合するものであったが、デューイはその「理性」を日常の生活実践としての民主主義へと変換し、プラグマティズムへの道を切り拓く。和辻の場合、空の論理を通じた日本精神への自己還帰は、歴史的な自己存在の了解という意味での教養のあり方を深めるものだが、社会的な実践としての契機は弱い。その点において、デューイから学ぶべきものは市民の日常の生活実践、生活態度としての民主主義である。それは、単なる制度としての民主主義ではなく、身体的な型を含む、社会的な知的探究としての教養である。

以上をふまえ、さらにアメリカの教養思想を宗教思想との関連から探究すべく、R. W. エマソンの思想研究に取り組み、国家と宗教の関係が市民的教養に影響を与えるという見通しを得た（現在執筆中）。

ところで、本研究期間中に東日本大震災が発生した。災害に際しての振る舞いも市民的教養の問題であると気づき、関東大震災と東日本大震災における思想家の発言を検討した。和辻倫理学の原点に関東大震災における被災民の観察経験があったことを再発見し、科学的教養の重要性を唱えた寺田寅彦の発言の意義も再確認できたが、個々の重要な論点は、国民精神論や天譴論に飲み込まれていった。デューイの教養思想から学ぶならば、震災による不全感や喪失感を大きな議論で埋め合わせるのではなく、そうした痛みを抱える自己をそれとして認め、他者との関係を一つ一つ作り直していくことが、震災後を生きる市民の教養として重要だと思われる。こうした趣旨の文章を、若者を対象とした図書の一章としてとりまとめた。

③木村俊道

本研究の分担者である木村俊道は、イギリスの教養思想の探究を課題とし、主に初期近代における作法と教養の関係を研究した。

以下に挙げる一連の研究の出発点となったのは、2009 年度に発表した「徳」（古賀敬太編『政治概念の歴史的展開』第 3 巻所収）である。そこでは、古代ギリシアより教養・教育（パイデイアー）の目的とされてきた「徳」の概念の、西洋政治思想における歴史的な展開が明らかにされるとともに、とりわけルネサンス期以降の教養 humanitas を支えた人文主義の伝統の理解が進められた。

続く 2010 年度には、単著として『文明の作法－初期近代イングランドにおける政治と社交』（ミネルヴァ書房）を刊行した。この作品では、シヴィリティ civility の概念をはじめとする「文明の作法」をめぐる議論の展開が、宮廷や作法書、大陸旅行、外交、共和国、チェスターフィールドといった主題との関連において明らかにされた。

2011 年度には、以上の研究の内容とその後の進展を踏まえ、2 本の研究発表を行った。１つが、日本政治学会における報告「シヴィリティの政治学－ヨーロッパ思想史における教養と作法」(2011 年 10 月 9 日、岡山大学）であり、もう１つが、研究セミナー「シヴィリティをめぐる東西の対話－礼節、市民性、公共圏」（12 月 15 日、九州大学）における報告「西洋におけるシヴィリティの観念」である。とりわけ前者においては、人文主義的な教養と作法との関連が指摘されるとともに、19 世紀以降に内面化・非政治化を強めた教養 culture の変容が議論された。

2012 年度にはさらに、政治思想学会（2012

年 5 月 26 日、國學院大学）において「初期近代イングランドにおける会話・交際・社交」と題する報告を行った。この報告は、2013 年 5 月に発行予定の『政治思想研究』第 13 号に掲載予定である。そこでは、会話・交際・社交を意味する conversation の概念を中心に、市民的人文主義や共和主義とは異なる、宮廷の人文主義の系譜が明らかにされている。

以上の一連の成果はまた、研究期間を通じて執筆が進められていた『デモクラシー以前の政治（仮）』（講談社選書メチエ、2013 年刊行予定）にまとめられる予定である。この作品においては、初期近代イングランドを中心とする教養の概念の特徴が、レトリックや思慮を含む実践知の観点から理解されるとともに、それがまた、作法に加え、とくに学芸・技芸を同時に意味した技術 art との関連において議論される。ここで明らかにされるのは、デモクラシー以前の教養の政治的・身体的・技術的性格である。

④井柳美紀

研究期間全体を通して、西洋政治思想史における政治的教養の概念の変遷史の解明を試みた。前半期には、近代フランス政治思想を中心に検討を行ったが、それを踏まえ後半期には、政治思想史における政治的教養の概念史の全体像を（古代ギリシア・ローマから現代に至るまで）素描することを試み、「政治教育」（共著『政治概念の歴史的展開　第五巻』晃洋書房、2013 年、79-104 頁）を公表した。「政治的教養」という概念は日本の「教育基本法」にも登場する重要な概念で、近年新たに注目を浴びている概念の一つだが、この概念史に思想的観点からアプローチした研究は稀であり、その点で本研究はこの分野の研究に対して一定の貢献をなしたと考える。古代ギリシアにおいては、教育とは全人格の育成を指す「パイデイア」という概念で呼ばれ、これは市民の育成としての政治教育そのものでもあったが、ヘレニズム期を経てキケロらにより、国境や祖国を越えた人間の教育としての「フマニタス（人間的教養）」の必要性を説く教養観が登場するなど、教養は政治的教養とは独立していく系譜がみられる。さらに近代においても、ルソーの思想に顕著なように、市民の教育、人間の教育、国民の教育のいずれに力点を置くべきかという視点が登場し、ルソーは人類愛に基礎をおく市民の育成を『エミール』で説く一方で、遠くの他者への共感には限界があり、公共心をもつ人民による統治のためには、一定の限られた空間が必要だとして、祖国愛に基づく統治の必要性も論じ、両者の間で葛藤したが、カントはルソーの『エミール』を継承し、世界公民的心情をもった市民の育成を主張した。一方、近代においては、市民革命を経て、政治社会を担う自律的な主権者の育成が課題となる中、例えば、コンドルセが、国民教育の主張に対して、市民の政治的判断力の育成を主張している。しかし、公教育の中立性が説かれるこの時代は、教育の政治的中立性が説かれ、政治的中立性と政治的判断力の育成との関係性をめぐる現代的問題も浮上する。近現代においては政治教育が知育の面に限定される傾向が強いが、コンドルセのみならず、トクヴィルやミルらの議論にも政治的判断力の育成の必要性を説く議論がみられるよう、知育であるより実践的判断力に比重をおく政治的教養の議論がみられた。また、プラトンらの理性に重きをおく教養観とは異なり、イソクラテスらの修辞学的教養を説く思想的系譜などについても明らかにし、ルネサンス、近代を経ても、実践的判断力を重視する政治的教養の系譜があることについても検討した。現代では、クリックが、能動的な市民の育成のため、知識、技能、態度の側面から政治教育の必要性を説いているが、そのような伝統はクリック自身が述べるように、西洋政治思想の伝統に深く根付いたものとして展開されてきた点を明らかにした。

⑤竹島博之

この共同研究における竹島の分担は、「独逸＜教養＞思想の探究：ドイツにおける市民的教養思想」であった。すなわち、フンボルトの新人文主義に始まる近代ドイツの教養の理念や教養市民層を思想史的・歴史的に検証し、他国との相互比較を可能にする形でドイツ教養思想史を提示することであった。そしてまた、そこから現代における政治的教養や政治教育について何らかの示唆を得る可能性を探ることにあった。

こうした課題に取り組むために、１年目は日本国際文化学会（佐賀大学）で「多文化状況における愛国心教育」というテーマで学会報告を行い、現代の多文化状況における市民的教養の課題を探った。２年目は、日本公民教育学会（京都教育大学）で「政治学の視点から見た政治教育―徳・思慮・シティズンシップを中心に―」というテーマで学会報告を行い、また現代規範理論研究会と九州大学政治研究会とが共催した研究会で「政治的資質と市民的徳性の教育論」というテーマの報告を行い（九州大学）、本研究のテーマである市民的徳性や政治教育に関する研究を進めた。さらに拙稿「戦間期ドイツにおける「失われた世代」のナショナリズム――E・ユンガーの議論を中心に――」（『比較文化研究』第 94 号）を執筆することで、ドイツ思想史の知見を深めた。

３年目は、バーナード・クリック『シティズンシップ教育論――政治哲学と市民』（関口正司監訳、法政大学出版局）の翻訳に参加

したり、拙稿「新自由主義と愛国心教育―安倍政権の教育改革を中心に―」(『東洋法学』第 55 巻第２号）を執筆したりすることで、現代のシティズンシップや政治教育に関する現代的問題に関する理解を深めた。そして４年目は、ウィル・キムリッカ『土着語の政治――ナショナリズム・多文化主義・シティズンシップ』(法政大学出版局）に監訳者として参加し、主にシティズンシップ教育に関するキムリッカの論稿の翻訳を担当した。

以上のような研究の取り組みを最終的に成果としてまとめたのが、拙稿「ドイツにおける教養の展開と政治的陶冶」(『東洋法学』第 56 巻第３号）である。本稿は、これまでの自らの研究成果と他の研究分担者の研究との比較を踏まえて、現代の市民的資質や政治的教養に関する何らかの言説が引き出せないかを模索した。したがって本稿の力点は、ドイツ教養思想の展開や教養市民層の歴史を踏まえつつ、そこから現代の政治教育や市民的教養に関して示唆を得ることに置かれている。

（２）研究代表者（関口正司）の研究成果

本研究の全体のとりまとめとともに、市民型リベラルアーツのあり方を探ることを役割としていたので、主に二つの点からこの任務を進めていった。第一に、政治的教養のあり方を探るという見地から、専攻分野である西欧政治思想史における古典的政治学の伝統の掘り起こしを行なった。20 世紀になってからは、デモクラシーは唯一正当化可能な政治体制だと自明視されるようになった。この傾向の背後に、よりよい政治生活には民主主義が必須であるという切実な信念や動機があったことはたしかであるが、半面、君主制や貴族制などとの比較を通じて、民主制の得失を正面から捉え、民主制でも免れない統治上の困難を見据えるという、古典的政治学の伝統が省みられなくなったと言えなくもない。しかし、そうした統治の諸問題を市民が把握し解決に向けた行動の能力を陶冶することが、政治的教養の大きな要素と言える。この関心からの探究の成果は、「多数の専制の見分け方」という論考であり、これは、国際フォーラムでの口頭発表などを経て、近いうち公表される予定である。

第二の点は、こうした基礎的研究と並行して、実際のリベラルアーツ教育としての大学での政治学教育や、中高生や一般市民を対象とした市民教育のあり方の探究である。一つは、従前から実施していた市民セミナーをふりかえる論文の執筆であった。さらに、のこの系列の作業として、クリック『シティズンシップ教育論』の監訳・翻訳・解説を担当するとともに、それを土台に、古典的政治学の伝統と、クリックのシティズンシップ教育論との関係を考察した。

以上の作業を通じて、今後は、市民型リベラルアーツのコアともなる市民にとっての政治に関する知識・技能・態度（政治リテラシー）のあり方を同定するという実践的作業を、思想史や政治哲学の基礎的研究と並行させつつ展開していく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14 件）

① 関口正司、バーナード・クリックの政治哲学とシティズンシップ教育論、政治研究、査読有、第 60 号、2013、41-71　DOI 及び URL なし

②木村俊道、初期近代イングランドにおける会話・交際・社交、政治思想研究、査読無、13 号、2013、72-103　DOI 及び URL なし

③清水靖久、戦後民主主義の原点としての人民主権、すばる、査読無、35 巻、2013、164-169　DOI 及び URL なし

④竹島博之、ドイツにおける教養の展開と政治的陶冶、東洋法学、査読無、56 巻、2013、97-125　DOI 及び URL なし

⑤清水靖久、丸山眞男・戦後民主主義以前、法政研究、査読有、78 巻、2011、211-241　DOI 及び URL なし

⑥竹島博之、新自由主義と愛国心教育―安倍政権の教育改革を中心に―、東洋法学、査読無、55 巻、2011、49-72　DOI 及び URL なし

⑦関口正司、鏑木政彦、石田正治、地域リーダーセミナーをふりかえる―傾聴力とつながりの強化をめざして―、法政研究、査読有、78 巻、2011、589-612　DOI 及び URL なし

⑧竹島博之、政治＝言葉のルーツ・歴史変遷の面白例（“言葉のルーツ・歴史変遷”＝授業に入れたいベスト 10)、社会科教育、査読無、621 号、2011、31-64　DOI 及び URL なし

⑨清水靖久、政治学と教養、社会科学、査読有、40 巻、2010、1-21　DOI 及び URL なし

⑩鏑木政彦、ティリッヒとカッシーラー―宗教の臨界をめぐって―、日本の神学、査読有、49 巻、2010、114-132　DOI 及び URL なし

⑪鏑木政彦、ディルタイと和辻哲郎―精神科学と国民国家―、ディルタイ研究、査読無、21 巻、2010、5-19　DOI 及び URL なし

⑫井柳美紀、18 世紀ヨーロッパにおける中心と周縁―ヴォルテール、ルソー、ディドロらの「未開人」への眼差し―、政治思想研

究、査読無、10 号、2010、31-64　DOI 及び URL なし
⑬竹島博之、戦間期ドイツにおける「失われた世代」のナショナリズム―E・ユンガーの議論を中心に―、比較文化研究、査読有、94 号、2010、239-249　DOI 及び URL なし
⑭清水靖久、丸山眞男の秩序構想、政治思想研究、査読無、9 号、2009、94-119　DOI 及び URL なし

〔学会発表〕（計 9 件）
①木村俊道、初期近代イングランドにおける会話・交際・社交、政治思想学会、2012 年 5 月 26 日、國學院大学
②関口正司、多数の専制の見分け方、日韓政治思想学会フォーラム、2012 年 7 月 6 日、延世大学
③木村俊道、西洋におけるシヴィリティの観念、研究セミナー「シヴィリティをめぐる東西の対話―礼節、市民性、公共圏―」、2011 年 12 月 15 日、九州大学
④木村俊道、シヴィリティの政治学―ヨーロッパ思想史における教養と作法―、日本政治学会、2011 年 10 月 9 日、岡山大学
⑤鏑木政彦、Kultur 概念編成の一断面：西欧化＝グローバル化に対峙する「生の哲学」、日文研共同研究会「東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に」、2011 年 9 月 17 日、国際日本文化研究センター
⑥関口正司、バーナード・クリックの政治哲学とシティズンシップ教育論、日本イギリス哲学会九州部会、2010 年 12 月 10 日、九州大学
⑦鏑木政彦、ディルタイと和辻―文化史の中の宗教、日本ディルタイ協会、2009 年 12 月 12 日、家の光会館
⑧鏑木政彦、ティリッヒとカッシーラー―宗教の臨界をめぐって―、日本基督教学会、2009 年 8 月 28 日、北海学園大学
⑨井柳美紀、18 世紀ヨーロッパにおける中心と周縁、政治思想学会、2009 年 5 月 23 日、青山学院大学

〔図書〕（計 12 件）
①古賀敬太編、井柳美紀他著、晃洋書房、政治概念の歴史的展開　第 5 巻、2013、79-104
②三好千春、大庭弘継、奥田太郎編、鏑木政彦他著、南山大学社会倫理研究所、3.11 以後　何が問われているか、2013、185-219
③直江清隆、越智貢編、鏑木政彦他著、岩波書店、高校倫理からの哲学４　自由とは、2012、2-43
④直江清隆、越智貢編、鏑木政彦他著、岩波書店、高校倫理からの哲学　別巻　災害に向き合う、2012、3-21
⑤ウィル・キムリッカ著、岡崎晴輝、施光恒、竹島博之監訳、法政大学出版局、土着語の政治―ナショナリズム・多文化主義・シティズンシップ―、2012、505
⑥富沢克編、竹島博之他著、ミネルヴァ書房、「リベラル・ナショナリズム」の再検討―国際比較の観点から見た新しい秩序像―、2011、302
⑦バーナード・クリック著、関口正司監訳、関口正司、竹島博之他訳、法政大学出版局、シティズンシップ教育論、2011、317
⑧デイヴィッド・ミラー著、富沢克、竹島博之他訳、風行社、国際正義とは何か、2011、368
⑨井柳美紀、創文社、ディドロ　多様性の政治学、2011、280
⑩木村俊道、ミネルヴァ書房、文明の作法―初期近代イングランドにおける政治と社交―、2010、323
⑪古賀敬太編、木村俊道、竹島博之他著、晃洋書房、政治概念の歴史的展開　第 3 巻、2009、1-23、148-169
⑫施光恒、黒宮一太編、竹島博之他著、ナカニシヤ出版、ナショナリズムの政治学―規範理論への誘い―、2009、148-169
〔その他〕
ホームページ
「九州大学政治哲学リサーチコア
http://quris.law.kyushu-u.ac.jp/~citizen21/

６．研究組織
(1)研究代表者
関口　正司（SEKIGUCHI MASASHI）
九州大学・大学院法学研究院・教授
研究者番号：60163101
(2)研究分担者
清水　靖久（SHIMIZU YASUHISA）
九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授
研究者番号：00170986

鏑木　政彦（KABURAGI MASAHIKO）
九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授
研究者番号：80336057

木村　俊道（KIMURA TOSHIMICHI）
九州大学・大学院法学研究院・教授
研究者番号：80305408

井柳　美紀（IYANAGI MIKI）
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号：50420055

竹島　博之（TAKESHIMA HIROYUKI）
東洋大学・法学部・准教授
研究者番号：90346734